

学問の自由、大学の自由。

大学を実践的な
知の形成の場に

橋爪大三郎 (東京工業大学助教授)
Daisaburo Hashizume

世界の大学ランキング
日本の大学は、国際的にまったく評価されていない。
ハーバードやオックスブリッジ、MITなどの超一流大学に水をあけられるのは仕方ないとしても、大学

世界ランキング
北京大学、清華大学や、第三世界の主要大学にも後れをとって、百番以下を低迷している。要するに、いくら日本で一流大学と威張っても、世界レベルではせいぜい二流、三流どまりなのだ。

こうしたランキングが、英語圏の人びとによって作られているという偏りはあろう。当然、日本は不利である。しかしこの時代、英語で読むに足る情報を発信していないとは、

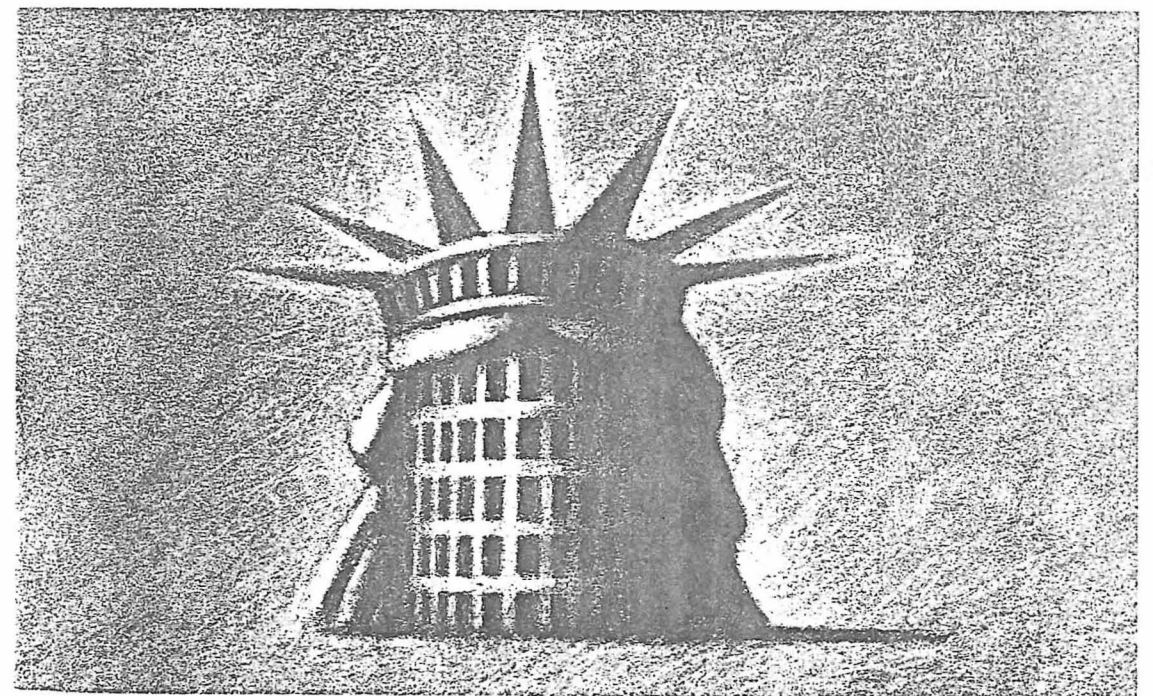


illustration / Hiroshi Watanabe

そもそも日本語でもろくな情報を発信していないということなのだ。

そんなことを言っても、東大はどうだという声があろう。なるほど、東大は入学試験もむずかしいし、総理や官僚や大企業の社長はやたらに東大出が多い。そういう基準でいえば、東大は一流かもしれない。

でもこれは、やはり日本ローカルな現象だ。入学試験がむずかしく、卒業生が高い社会的地位につくからといって、よい大学であることにはならない。教育、研究のレベルが高いかどうかは問題なのだ。そして東大の場合、そこそこの優秀な学生が集まっているから何とかなっているだけで、ほんとうは教育も研究も大したことはないのである。

育成の壁 知のば

日本の大学がだめなのは、日本ローカルな組織になってしまっているからだ。まず、入学試験がむずかしくて、事実上、日本の受験校を卒業した日本人しか入れない。つぎに、

理系／文系といった妙な垣根ができていて、トータルな学問をきちんと教えていない。第三に、「教授会の自治」のぬるま湯につかっている。教授たちのあいだに競争原理がまるで働いていない。この三つの壁をとり払って、学生や教授スタッフのせめて半分を外国人に開放しないと、日本の大学が立ち直る見込みはゼロである。

理系／文系の区別を、当たり前だと思っている日本人が多いので、少し説明すべきだろう。

そもそもこんな区別があるのは、発展途上国の特徴である。黒板とノートがあればすむ文系にくらべ、理系は実験設備に金がかかるので、明治時代の日本は、学生数をしばらくざるをえなかった。そこで数学の試験をし、文系／理系をふり分けることにした。入試問題が別々なので、その前の段階で文系／理系を選択しなければならぬ。そこで何となく人間には二種類ある、みたいな感じになってしまった。理系の人間は、政治・経済はわからないし、知らなくていい。文系の人間は、数字や自然科学がわからなくていい。互いに話が通じなくても、生きていくのに困らないから、というわけだ。

人の上に立つ人間が、これでは困る。日本でも昔は、ナンバースクー

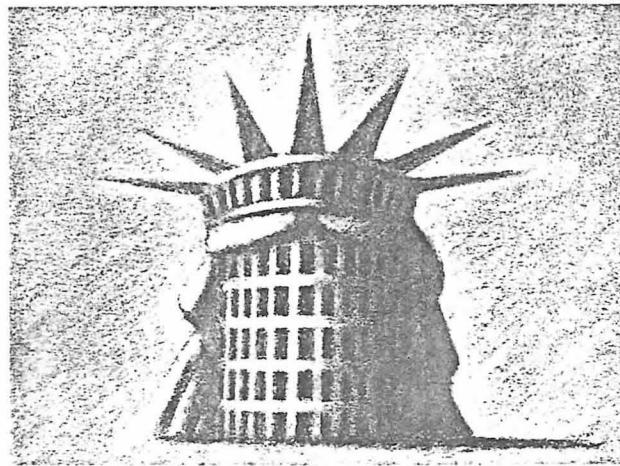
ル(一高、二高、……)では文系／理系ごたまために寮生活をさせて、最低限の知識を共有するようにした。外国では「リベラルアーツ・アンド・サイエンス」など、芸術と数学を一緒に教える学部があり、専門教育は大学院から始まることになっているところも多い。ところが戦後の学制改革で、旧制高校はエリート教育だからと全廃されてしまった。大学の寮も学生運動対策で、どんどん壊された。その結果、日本の政治も文化もだめになり、会社人間ばかりがはびこることになった。

文系／理系の人間を別々に育てるのは、どちらも会社就職することから前提になっている。会社就職してから、理系の人間は研究所や現場で新製品の開発にたずさわって、文系の人間は営業・経理・人事・総務・労務など、製品の販売や会社の管理にたずさわって、手分けをして会社を支えようという、予定調和なのだ。知識が偏っているから、独立しようにも一人では何もできない。会社を飛び出してベンチャービジネスを起こそうというタイプの人間は、だからほとんどいなくなる。文系／

理系の区別、卒業生の知識を偏らせ、会社に依存させるための仕組みなのである。

に タス 一学 ト科 能度

こういう態勢で日本企業がやってこられたのは、海外から特許を仕入れたら、基礎研究にただ乗りしたりという安直なやり方ができたからだ。おかげで日本は経済大国、こんどは自前で研究・開発投資をしなさいと言われてしまった。そこで八〇年代に「創造性」が合言葉になったわけだが、かけ声だけで創造性が育つわけでもない。まずさつさと、文系／理系の垣根をこわさないとだめなのだ。本来すべての学問は、有機的に結びついている。物理学と経済学、数学・論理学と哲学、人工知能と言語学、医学と心理学、等々。こうした学問が密接に関連していることは、ちよつと勉強すればすぐわかるだろう。ある現象を解きあかすため、これまでの学問や知識を総動員して、トータルに科学する態度、これがな



アメリカの学術レヴェルが世界一流なのは、世界中に門戸を開放し、すぐれた学者を集めているからだ。以前のアメリカは、ヨーロッパに比べて学問は大したことなかった。一九三三年までのノーベル賞受賞数（文学賞を除く）は、ドイツが三十九個あまりで断トツの第一位。フランス、イギリスがこれに続き、アメリカはひと桁だった。ところが折から

により大事なのだ。一流大学は、こうした果敢な挑戦を繰り返す人材が集まって、盛んな競争を繰り広げていなければならないのである。文系／理系の垣根のほかに、大学には、タコ壺化した既成の学問の垣根が張りめぐらされている。教授たちは、いったん手にした人事や予算の実権にしがみついて放さない。このような組織防衛の心理に大義名分を与えているのが、「教授会の自治」の看板だ。その実それは、競争なし、業績なしでも大学をクビにならないための隠れミノにはかならない。渡辺美智雄氏は『新保守革命』で、国立大学を民営化しようと提言しているが、さつさとやっつけてほしいものだ。教授たちが国家公務員であるおかげで、レイオフも年限付きの

世界に開く 門戸

大学の自由化と、切っても切れない関係にあるのが大学の国際化だ。大学はもともと国際機関で、世界中の学者が自由に行き来する場所であ

雇用もできないし、あべこべに給料をはずむこともできない。国立大学などというアイデアは、大学のことをちつとも知らない役人が思いついたのに違いない。規制と許認可と談合の塊り、大学。これを自由化し、高等教育研究機関としての機能を回復させないと、日本の未来は危うい。

ある。だから、大学を国際化するには、国際共通語が欠かせない。イスラム世界の大学はアラビア語、ヨーロッパ中世の大学はラテン語が共通語だった。現在は、英語である。国際共通語があつてはじめて、民族・文化の違いに関係なく、だれでも対等な資格で学問ができる。日本の太学も、日本語だけでなしに、英語も公用言語とすべきなのだ。ある大学で最近実際にあつた話。学長が留学生たちのために、英語で講演をすることになった。結構な話である。ところが当日ふたを開けてみると、会場はがらがら。何百人もの留学生はどうしてしまつたのか？調べてみると、「学長が英語で講演します」というポスターを日本語で貼り出したため、みんな読めなかった

のであつた。

こんなことにならないために、英語のできる職員を増やさなければならぬ。大学の案内板からはじまつて、学則、授業案内、履修申告の仕方、そのほかの書類にいたるまで、税関の書類みたいに、必ず英語を併記する。キャンパスは、英語だけでも生活できる空間でないとだめなのだ。もちろん日本人の学生にも、そのことを徹底させる。

大学で英語が通用する。これを当たり前にして、日本の大学改革の出発点にしよう。そうすれば、英語しかできない学者や学生が、日本語ができて来られる。世界中から日本にやってくる。そうでなければ、とてもアメリカに追いつくのはむずかしい。

ヒトラーの登場で、ヨーロッパ中のユダヤ人学者が海を渡ってアメリカに逃げてくる。アメリカもこの千載一遇のチャンスを見逃さず、彼らにどしどしポストを提供、このとき以来アメリカの優位は揺るぎないものとなった。戦後アメリカの大発展は、こうした英断のたまものである。日本も本気で科学立国をうたうなら、同じく世界（特にアジアの国々）に門戸を開かないとだめだ。日本の官僚や大学の体質をみると、やや絶望的にならざるをえないが、とにかくこれしか道はないと彼らは悟るべきなのだ。

を の 人 と

日本には大学が、数百はある。その全部が全部、国際化しろとは言わない。ドメスティックな、いままで

通りの大学もあつていい。ただし、少なくともその一割、多少とも名の知れた大学は、教授会の自治などさつさと廃止し、国立大学は民営に移行して、徹底的な組織改革を始めるべきだ。大学設置基準をはじめとする、あらゆる規則はすぐ廃止したほうがいい。塾や予備校には、なんの設置基準もないが、立派に社会の期待にこたえているではないか。文部省が何も口を出さないほうが、うまくいくに決まっているのだ。まず、諸悪の根源、学生定員をなくす（国立大学では、定員びたりに学生を採らないと怒られ、それをそのまま卒業させないとまた怒られるのである）。定員の枠さえなければ、学生をどしどし落第させられる。やつと大学教育が機能できるわけだ。定員がなくなれば、入学試験なしでも大勢学生を採ることができるとし、そのあと成績に応じて単位を認めたり、進級・卒業させたりすることもできる。入試の壁が取り払われれば、

社会人や留学生も喜んで大学にやってくるだろう。中学、高校生も受験勉強から解放されるかわりに、大学生たちは一生懸命勉強しはじめる。こうした正常な姿が、学生定員を廃止すれば実現するのだ。教員の公募と、自由移動も大事である。形ばかりの公募をし、実際にはうちうちで人事をたらい回しにしている大学が多い。こんなやり方が国際的に通用すると思つたら大間違いだ。少なくとも一流の大学は、ガラス張りの実力主義一本でいかなければならない。

日本人は、大学を経営するノウハウに乏しいのかもしれない。それなら、学長をスカウトして連れてこよう。つぶれかかったアメリカの三流大学でなく、一流大学に日本分校を作つてもらつてもいいではないか。とにかくあらゆる手段を講じて、日本の学術レヴェルを向上させることを考えよう。大学のレヴェルアップには時間がかかる。いまずぐ手をつけないと遅い、と私は言いたい。